

海、太陽への問いと諦め

— 森鷗外の『妄想』を巡って —

テレングト・アイトル

(艾 特)

一、

漱石の『三四郎』(明治四一年)に刺激されて、それへの模倣といってもいいほどの作品『青年』(明治四三—四四年)を上梓した鷗外は、これを機会に小説への再挑戦、或いは再模倣といってもよい一連の作品を書いている。その中の『蛇』(明治四四・一)、『妄想』(明治四四・三—四)、『百物語』(明治四四・十)などは、自分や自分の経験したことや自分に関係する物事や人物を題材にして書いて置くという類の小説に属するであろう。そういう傾向ほどの小説家にもある。日本においては、それが「身辺小説」や「私小説」のようなものに展開していく小説家もいれば、個人の身辺の些事から段々と

物語構造を有する小説へ発展したり、さらには社会的な問題への取り組みに発展させていく小説家もいるであろう(勿論、それだけに限らず、例外はいくらでもあるが)。ところが、鷗外においては、題材がこの個人の身の上にかかわる事のようにも、明らかに、その中には個人を遙かに超えた深い意味が隠されていて、それはひよっとすると一民族一国家、人間全体に関する深い意味が付着しているものとも見える。『妄想』はそういう意味において、鷗外が作家として、自分の経験や身辺のものを題材にして書いたものの中で、とりわけ深い意味を暗示したものである。そこには日本人にとどまらず、人間一般についての問題が提示されているようである。そこで、ここでは、鑑賞的な視点で、小説『妄想』に何が暗示されているかをみていきたい。そして、鷗外が何を言おうとした問

題を探ってみた。

二、

鷗外は家庭問題をめぐる『蛇』を一九一二年一月に発表し、それを受け継いで、すぐ一九一二年三月にまた『妄想』を発表した。『妄想』は鷗外の作品群の中でとりわけ難しいとされてきた作品だが、幸いに先行の評論家や研究者らが精密に分析している。例えば、小堀桂一郎、平川祐弘、三好行雄、唐木順三などによって論及されているが、その中にとりわけ小堀桂一郎氏の約二年をかけた労作——『森鷗外の世界』（講談社1971.5）の中の第二部の『妄想』の精神世界」と題とした百六十八頁にもぼる論文——は、鷗外の『妄想』に書かれた、史実的に調査可能なもの全てにわたって遺漏なく綿密に調査の上、検証して論証したのである。その論文の中で、『妄想』を書いた鷗外がいかなる思想を遍歴し、辿ってきたのかを、鷗外の実生活の調査と、鷗外の当時の歴史的な背景、(ドイツと日本などの当時の歴史の史実)をもって明らかにしたのである。それは完璧で、鮮やかな論証だと言わざるを得ない。もし鷗外本人が在世だったとすれば、時には鷗外自身もびっくりするような事実を以て、『妄想』の中で述べられたことを照らし出したのである。文献学的な論証がここまで当時の物事

を再現し、読者の前に顕現させてくれるとは、さぞ鷗外の伝記作家も呆氣に取られるであろう。例えば、鷗外は『妄想』において、翁の主人公を通じて、ハルトマン(1842-1902)の『無意識哲学』をドイツの留学時に読み耽っていたといっているが、小堀桂一郎氏の指摘では、それは東京に帰ってきてから読んだのだという。即ち、鷗外がハルトマンに最初に触れたのは、確かにドイツのベルリンの滞在中で、それは鷗外の手沢本シュヴェーグラー『哲学史概要』(現『西洋哲学史』谷川徹三、松村一人共同訳／岩波文庫／1939.9.)の中にある鷗外の書き入れ文字によって裏付けられている。しかしながら、鷗外がハルトマンの『無意識哲学』の实物を読んだのは日本に帰国してからのことなのだ⁽¹⁾。さらに、鷗外は『妄想』においてフィリップ・マインレンデル(1841.10-1876.4)『救済の哲学』について要領よく要約しているが、それも小堀氏の指摘では、鷗外は原書にあたっての上ではなく、ロシア生まれフランスの動物学・細菌学者イリヤ・イリツチ・メチニコフの名著『人の生と死』(現『人生論』八杉龍一訳／新水社1991.3)の第二部第八章中におけるマインレンデルの哲学についての概説を利用したという。その上、『妄想』の中でどのようにメチニコフの『人の生と死』の要約を引用したかについて詳しく論証したのである⁽²⁾。

鷗外の小説がここまで文献学的な検証をされたら、作者と

しては創作の筆に少なからず戸惑いを感じるのではなからうか。ところが、二十世紀末の今日になって、私達は鷗外を振り返ってみる場合、特に鷗外の精神とその文学的な基礎になる思想の辿った道を顧みる場合、小堀氏の『妄想』の精神世界¹は、これ以上の手頃な史実と文学的な解説の基礎になるものはないと断言してもいいぐらいである。三好行雄氏の言葉²を借りて言えば、それは「小説のディテールについて、事実と虚構の脈絡をほぼ完璧に洗い出した精緻な研究」³である。恐らく、『妄想』という小説の史実や背景についての研究は小堀氏の研究を以て最高峰を極めたと言っても過言ではないだろう。今後鷗外についての新しい歴史史実的な資料が見つからないかぎり、『妄想』に関する史実の研究は小堀氏の研究を以て定説だと言わざるを得ない。それ故、もし、だれかが鷗外の『妄想』と、鷗外の関連の思想などについて何か(学問的な意味で)を語ろうとすれば、小堀氏の研究を避けていくわけにはいかない。(それはまさに『妄想』という小説の学問的な研究に対する最大の寄与だといえるものであろう。そこに真の学問的な研究の存在の意味があると信じてやまない。)そういう確固とした先行研究は、鷗外の思想と精神の基礎なるものに確実な光を当てているから、鷗外の小説という交響曲を聞くには、そのハモニーから主音を聞き取るには、この上ないよい案内書、参考書である。

ところが、『妄想』は小説として読まれる以上、それがまたフィクションという意味で、史実や時代背景や作家の意図に反してまでも自律的に働きかけることがあるということも認めざるを得ない。小説に描かれた諸イメージは、時には思想よりも射程距離が遙かに遠い場合があることを、小説自体が、時には無言のうちに語ってくれる。従って、『妄想』においても小説のイメージの自律的運動が可能だとすれば、『妄想』は更にまた多様な批評を許容する面があるに違いない。したがって、ここで、『妄想』を専ら作者の精神の関歴のドキュメントとしてだけではなく、またその反対に、『妄想』を全く作者と関係なくフィクションとして読むのでもなく、『妄想』を一種の鷗外の精神的な探究の道程が読み取れる芸術的なメタフィクションとして読んで行こうと試みるのは、あながち外的の独走ではないだろう。恐らく、こういう小説に現れているフィクションとしてのイメージと、作者の思想的な遍歴と道程との、いずれをも配慮して読むならば、これは『妄想』に対して、選ばれるべくして選んだ接近法の一つと言えるであらう。

実際、評論家や研究家達の『妄想』への論及は、さまざまである。例えば、唐木順三氏は「勿論、爛々たる目で遠い海を望む主人公には複雑なものがあろう。然し『妄想』に漠然と示されているものから、この幻影を強いて引き出せば、要

するにそれは未来の自然科学なのである。」と『妄想』において鷗外が翁を通じて自然科学へ期待をしているという面を強調している。それに対して、山室静氏は「鷗外の世界観を知るには逸することのできない作。青年時代を回想し、現在を語り、将来をおもう彼の精神の物語といふべきものである。」と、『妄想』の伝記的な性格を重んじている。そういう個人的な面や伝記的な面を強調しているのに対して、平川祐弘氏と小堀桂一郎氏は明らかに鷗外の東西文化の直中にある立場を配慮して『妄想』を見ている。平川祐弘氏は「……鷗外が自分からまともに死の問題を取りあげたのは明治四十四年作の『妄想』だと思ふ。」⁽⁶⁾と言及しており、小堀桂一郎氏は「晩年の鷗外がいわゆる歴史小説・史伝を通じて、日本人とは何か、日本人の内面性とは何か、何が日本のエートスなのか、という探究に赴かざるをえなかったきざしはすでにここにも読み取れるのである」と『妄想』を日本文化の世界においての意味で読んでいるのである。さらに木下李太郎の指摘を引用して『妄想』は「『悲哀に似る一種の気分』、あきらめともみえ、うらみともみえる寂寥の気分の、これもまたそのあらわれであるう。」⁽⁸⁾と、その諦めや諦念などの悲哀的なものを読み取っているのである。

このようにみると、『妄想』という作品自体の豊かなイメージがこの作品の多くの側面をおのずから語っているのです、そ

こには同じく多くの読み方の可能性が秘められている。従って、作品の自律的な要素から発して、日本文化的な意味において人間の死生観を読んでも、つまり、三好行雄の言葉を借りて言えば、「……『妄想』は語の正統な意味で、一個の観念小説、ロマン・イデオロジックであり、観念の動きにそって実生活の事実が選択され、整序されている」⁽⁹⁾小説として読んでもけだし差し支えはないであろう。次に『妄想』の観念的な数多くの可能性の中から一つだけのファクターを拾って読んでいきたい。

三、

『妄想』は、プロローグとエピローグの設定から、六節に分けられる小説だと見ることができが、その粗筋を簡単にまとめて読めば、次のように「整序」された小説になることができる。

「目前には廣々と海が横はってゐる」⁽¹⁰⁾海を眺めている白髪の主人は水平線に日がずんずん昇っていくのを見て、時間ということを考え、生ということを考え、そして死ということ考えた。考えるにつれて、自分の二十代から今までの思想的な、或いは哲学的な遍歴を回顧せざるをえない。二十代

は「處女のやうな官能」⁽¹¹⁾的な段階だといえるが、時には學問に齷齪して何かの「役」をしているやうで、「此役が即ち生だとは考えられない。背後にある或る物が眞の生ではあるまいかと思はれる」と⁽¹²⁾いう。そして、自然に社会的な「私」を考へることになるが、西洋人みたいに「自我が無くなる為の苦痛は無い」⁽¹³⁾。また西洋人みたいに死を恐れることはない。それどころか、却つて、日本の切腹の価値を教えられたことがある。しかし、それも「生」と「死」ということを解するに助けにならない。またある時のキリスト教の思想を思い出すが、慰藉にはなれない。そして、…「自然科学のあらゆる事實やあらゆる推理を繰り返して見て…併しこれも徒勞であつた」⁽¹⁴⁾。ハルトマンの無意識哲学とスチルネルと「シヨオペンハウエルを読んで見れば、自分はいよいよ頭を掉つた。」三年の留學が過ぎて、故郷へ帰つてきたが、「*Katastroph*な、鈍い、陰気な感じに襲はれた」⁽¹⁵⁾。東京都会改造論、食物改良、仮名遣改良などに口を出したが、「洋行帰りの保守主義者」⁽¹⁶⁾の元祖として終つた。そして、「自然科学よ、さらば」⁽¹⁷⁾になつた。「日の要求を義務として、それを果して行く」やうな境地は「自分にはできない」⁽¹⁸⁾。「此儘人生の下り坂を下つて行く。そしてその下り果てた所が死だといふことを知つて居る。…老年になるに従つて増長するといふ『死の恐怖』が、自分には無い」⁽¹⁹⁾。若い頃、死の謎を解きたいと焦つていたが、今焦

らなくなつた。マイレンデルの『救済の哲学』を読んでみたが、彼と同じやうに「死」に憧れもしないし、その反対の死の恐怖もない。昔から現在までの本を随分読んだ。しかし、あたかも辻に立つて、多くの人を見たやうで、たびたび帽子を脱いで敬意を払つた人がいたが、その跡について行く気はなかつた。ニーチェの「永遠なる再来」⁽²⁰⁾も慰藉にならない。パウルゼンには同調できなかった。

そして、世の中には、科学の破産を唱えているものもあれば、メチニコフのやうな樂天哲学が科学を信じて、全ての人間の命を自然死という極限まで延ばすことが可能だということもある。しかし、翁にとってはいづれも限界があるやうに思われた。

白髪の主人は海を眺めて「かくして最早幾何もなくなつてゐる生涯の残余を、見果てぬ夢の心持で、死を怖れず、死にあこがれずに」⁽²¹⁾日々を送っている。

「その翁の過去の記憶が、稀に長い鎖のやうに、刹那の間に何十年かの跡を見渡させることがある。さう云ふ時は翁の炯々たる目が大きくみはられて、遠い遠い海と空とに注がれてゐる。」⁽²²⁾

この小説は現実的に鷗外がどういふ環境において、どういふ經驗をしてから書いたのかという事実關係への問いかけを

一応さて置くとして、鷗外は多くの哲学者とその思想の解説を説いて、一々その説を簡明に要約して死と生についての答えを求めている。そこでは結局、一つのモチーフ、生と死と生への慰藉しか探っていないように見え、小説の最初から最後まで「死」と「生」への問いを離れたことはなかった。彼が答えを問ひ求めた哲学者達——ハルトマン、スチルネル、シヨオペンハウエル、マインレンデル、ニーチェ、パウルゼン——などは、メチニコフを除いては、全て生死について楽観的ではない人で、それらの哲学者の名前を見るだけでもこの作品は、前に言及した小堀氏によって指摘された「悲哀に似る一種の気分」(木下本太郎語)、あきらめともみえ、……寂寥の気分」に満ちているのである。事実、吉野俊彦氏の調査によれば、『妄想』には、「生」という言葉が十八回、「死」という言葉が三十八回⁽²³⁾も頻繁に出でくる。そこには鷗外の個人の読書感想という類のものではなく、また鷗外がそれらの哲学者の要約を通じて自分の生死の問題を探ただけではなく、そこには人というものに対して、生死ということは何であるかを主人公の翁を通じて問ひ求めているのと言えよう。言い換えれば、それは一人間の生というものは何であるか、時間というものの前に生というものがどういう意味があるのか、いままでのとおり、これからも生と死が人を悩ませ続ける問題なのであろうかなどのような一連の古来からの哲学に扱わ

れている問いを、作品の中で執拗に追ひ求めているのである。特に、翁が海岸に佇んで多くの思索を巡らせながら、海と日の出と日の歩みを眺めているイメージは、作者の鷗外と主人公の翁が言葉で表現すべきことよりも、言わなかったことの方が遙かに多く、そこにより深く、豊かな暗示が秘められていると読めなくもない。勿論、主人公の翁の海岸での生活ぶりや場面が鷗外の翻訳作『冬の王』(明治四五年)⁽²⁴⁾の主人公のエルリングの生活ぶりから示唆を受けてのことだと、小堀氏の研究においては、いわゆる内的証拠をもって証明されている。にもかかわらず、鷗外の手によって書かれた翁の海岸生活ぶりは、その死と生への根源的な問いを發した以上、そのイメージ自体がすでに多くのことをおのずから物語っている。翁は生と死の問いと慰めをキリスト、自然科学、ハルトマン、スチルネル、シヨオペンハウエル、マインレンデル、ニーチェ、パウルゼンなどに求めた。しかし、何れも徒勞に終わった。そして、翁は「日の要求を義務として、それを果たして」足ることを知るといふこともできない。世の中には、科学の破産を説いたものも、科学を信じているメチニコフのような人もいる。その中のメチニコフの主張には、未来は科学が人間の命をずっと延ばすことができる⁽²⁵⁾と説いているが、しかし、それもその生と死への問いの答えにはならなかった。翁は自分の遍歴を回顧しながら、生と死への問いを探りつつあ

る。ここまで生きてきて、謎が解けなくとも、あせらなくなり、死を恐れず、また死に憧れずにもいられるようになり、一種の自然の摂理に遠観したあきらめの気分が、そこに漂っている。そして、翁の炯々たる目が、遠い遠い海と空とに注がれているという小説の最初と最後のそのイメージは、その心情を充分に表現している。

四、

『妄想』における翁は、海岸に佇んで、人間の生と死を巡って思索を巡らせ、太陽、海を眺め、遠い遠い空を眺め、多くの哲人に問いかけているが、その描かれたイメージを鑑賞的に連想してみれば、フランスのアカデミスムの代表的画家ジェロム (Gerome Jean-Leon 1824-1904) の「王者」(注の絵を参考) という絵に似ていなくもない。その絵は決して世によく知られている有名な絵ではないが、イメージの共通点においては、また、『妄想』において漂っている一種の諦めの気分においては、実に無言のうちに両者が同じ事を訴えていると言えらる。その絵はこういう構図からなっている。中近東の砂漠のような荒涼たる海岸と海が横たわっており、そこに沈みつつある(或いは昇りつつある)太陽が眩しくもなく、しかし全世界を支配しているような存在として描かれている。そ

して、手前の小さい砂の丘に一匹の孤独なライオンが佇んで静かにそれを眺めている。全体の色はやや霞んでおり、広大な空間にはその他何も描かれていない。その絵ではライオンと太陽、海が対時的に描かれ、ライオンの生の短さ、脆さと、太陽、海の永遠とが対照される。生を欲するライオンの無念、悲哀、そして、その反対、太陽、海という永遠の象徴のような存在、それに向かって思索を巡らせ、永遠を憧れるような、或いは生というものへ虚無的にあきらめたような、そういう諸々のことがその絵から伝わってくる。それは、あたかも鷗外の言葉で描かれた翁の、海、太陽に向かって「炯々たる目を大きくみはられて」思索を巡らせたその瞬間の境地を、「二王者」という絵画で描いたかのようで、或いは、鷗外の翁のイメージが「二王者」に凝縮されたかのようである。鷗外の翁も、ジェロムのライオンも、同じくこの世の生きものとして自分の一生を顧みながら、どうしてそのうちこの世から去って行かなければならないであろうかという回答の得られない悲哀めいた思索を巡らせて、海と太陽を眺めている。いずれも海、太陽を眺めながら、生と死に関して問いかけをしているのであるが、鷗外の主人公の翁のイメージと、ジェロムのライオンのイメージは、全くの偶然にも一致しており、しかも偶然に一致して同じ気分と思索を表現しようとしている。それは人間の根源的な問いにおいては、芸術の本質が芸術家

たちに働きかけているのか、それとも芸術家たちが同じ境地へ歩むべくして歩んだ結果なのであろうか。いずれにせよ、ここに翁とライオンの生と死に向けての複雑な思ひは、一致して荘重なレイクエムを響かせているようである。

実際、この人間の生と死への素朴でありながら、本質的な問いかけは、太古以来多くの哲人、賢人達に問われて来たことなのだ。鵑外の主人公の翁と同じように、多くの哲学者に一々鮮明に人間の本性について問いかけたのがマルティン・ブーバーかもしれない。ブーバーは「人間とは何か」⁽²⁶⁾(それは鵑外の問いかけた問題よりは広いが、その中にも「死なねばならぬことを知っているものとしての人間の実存」の問題が常に絡み合っている。⁽²⁷⁾)の中で、文学という形ではなく、哲学的人間学という学問的な立場からその問いを探ってみたが、カントの問いかけから、問題提起をして、「人間とは何か?」⁽²⁸⁾を巡って、アリストテレス、アウグスティヌス、ヘーゲル、フオイエルバッハ、ニーチェ、ハイデガー、シェーラーらを一々考察しながら、人間とは何かの回答を得ようとしたが、結局、「人間とは何か」という問いへの答えを正面から得うことはできなかった。最後にブーバーは「人間と人間との生きた関わりの中においてのみ、人間の本質性、人間に固有なるものが、直接、認識されるのである。：なせなら、人間は、つまり自我は、汝との関係に基づいてこそ、はじめて存在するからで

ある。」という「人間と共存しつつある人間」⁽²⁹⁾の考察から人間を説明しなければならぬという結論に達したのである。(ややペダンティックな感じがあるが)。ここに、結局、鵑外の翁の問いかけたことに対しては、ブーバーも同じく答えが見つからなかったと見える。たとえ鵑外がブーバーを読んだとしても、翁は同じく「頭を掉った」に違いない。この本質的な問いは洋の東西を問わず、実に多くの賢人、達人に問われてきた。しかも、それが鵑外の翁によってただ個人と自己への慰めを探っていると見えながら、その問いかけにはすでに鵑外とその翁を超えて、人間一般の本質への問いが含蓄されており、そしてその問いは人間の本質的な問いとして顕れて来る。そこに『妄想』という小説は鵑外と翁の個人の人生の問題よりも、人間一般の本質的な問題が含まれていると言えよう。

五、

『妄想』における鵑外の翁は、多くの賢人、達人と同じくその問いを追求したが、結局、結論を出せなかった。しかし、翁は「謎は解けないと知って、解かうとあせらないやうにはなった」。そして、翁は「死を怖れず、死にあこがれずに」余生を送るようになった。そこにブーバーを含む多くの西洋の哲学者とは違って、諦めという東洋的な世界観が見えなく、

もない。けだしそこには、日本人の古来の、いや、東洋の古来の自然崇拜の世界観、人生観が表れているのではないか。つまり、自然の摂理に従い、人為を一時の営みと見做して、あらゆる生への解釈に「頭を掉」る。そして、あげくに、焦らず、怖れず、憧れずにあたかも自然の源へ戻るような、自然に回帰することを待つような、永遠の自然を相手にして、自分のすべてをそれに任ずという諦めの人生観が『妄想』において提示されているのではないだろうか。鷗外は『妄想』の翁という主人公を通じて、自分の、或いは人間のレクイエムを歌いたかったのかもしれない。ただ、普通のレクイエムと違っているのは、鷗外の翁においてはそこに明らかに東洋的なものが滲み渡っており、そこには、諦めという生き方の主音が響いているのである。そこにはまた鷗外の有名な「諦念」(Resignation)の響きも伝わっていると感ぜられなくもない。一方、東西文化という視野において見れば、「日本で結んだ學術の果實を欧羅巴へ輸出する時もいつかはくるだろう」と思った鷗外は、『妄想』において、キリスト教と仏教と西洋の哲学における死生観を認めることができず、それらに対して、鷗外は翁を通じて、最後に暗示的提示してきたのは、「死を恐れず、死に憧れず」という「自然」のありのままを尊ぶ日本の死生観だと言えようか。

『妄想』という作品は、鷗外がほとんど自分の精神的閱歴

をふまえて、死生観ないし人生観を探ったものだとも読めるだろう。なぜなら、それは何よりも小堀桂一郎氏の確実な文献学的な研究によって裏付けられ、そして、その研究を通じて、鷗外の、あるいは翁のその精神的閱歴を細かく、また深く、一々辿り着いて読み取ることができたからであり、かつその文献的研究を通じて、われわれは多くの哲学者たちが、どのように生と死の問題を真剣に取り組んだかを目の前に現前している如く追体験できたからである。そして、「死を恐れず、死に憧れず」という「自然」のありのままを尊ぶという死生観は、これもまたあのかつて激しい論争を煽り立てた有名な鷗外の臨終の遺書への理解に一つの示唆を与えているのではなからうか。鷗外の三つの遺書の最後の遺書を引いてみると、

死ハ一切ヲ打チ切ル重大事件ナリ……余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス

宮内省陸軍皆様縁故アレドモ生死ノ別ル、瞬間アラユル外形的取扱ヲ辞ス……

森林太郎トシテ死セントス 墓ハ森林太郎墓ノ外一字モホル可ラス……

〔『鷗外全集著作篇』第十七卷／岩波書店／三〇四頁〕

亡くなられる十一年も前に『妄想』を生み出していた鷗外

は、既に「死を怖れず、死にあこがれず」に、自然のありのまままで死んでゆくという日本的、東洋的の死生観を我身につけていたのであろうか。この遺書は鷗外が、『妄想』において書かれた翁の死生観をそのまま自分の死生観として現実に実現した言葉のように思えてならない。鷗外は軍医や官僚や文人や名門の末裔として死ぬのではなく、断固として自然のありのままに（森林太郎として）死んでいくという。それは、『妄想』の翁を通じて歌った人間へのレイクエムが、この遺書を以て完結されたのだと言えるのであろう。そして、あげくのほてに、恐らく、鷗外は翁と同じように、太陽、海へ問いかけ、また、ジェロムの描いた孤独なライオンのように、あきらめの境地においてこの世を去ったのであろう。

注

- (1) 小堀桂一郎著、『森鷗外の世界』、講談社、一九七二年、一九九頁
- (2) 前掲書、二七八頁
- (3) 三好行雄『「妄想」の地底——漢文体の世界——』、『日本文学研究資料叢書・森鷗外Ⅱ』、有精堂、昭和五四年、一八三頁
- (4) 唐木順三著、『唐木順三全集第二卷』、筑摩書房、昭和四二年、

九七頁

- (5) 山室静著、『評伝・森鷗外』、実業之日本社、昭和四二年、一九七頁

- (6) 平川祐弘著、『和魂洋才の系譜』、河出書房新社、一九八七年、四一一頁

- (7) 小堀桂一郎『「妄想」小論』、『日本文学研究叢書・森鷗外』、有精堂、昭和四五年、二二二頁

- (8) 前掲書、二二五頁

- (9) 注(3) 同著、一八四頁

- (10) 『鷗外全集著作篇』第三卷、岩波書店戦前版、「妄想」、一〇三頁

- (11) 前掲書、一〇五頁

- (12) 前掲書、一〇八頁

- (13) 前掲書、一一〇—一一二頁

- (14) 前掲書、一一二頁

- (15) 前掲書、一一七頁

- (16) 前掲書、一一九頁

- (17) 前掲書、一二〇頁

- (18) 前掲書、一二二頁

- (19) 前掲書、一二二頁

- (20) 前掲書、一二八頁

- (21) 前掲書、一三〇—一三二頁

- (22) 前掲書、一三一頁

- (23) 吉野俊彦著、『あきらめの哲学・森鷗外』、P H P 研究所、昭和五三年、一一四—一一五頁を参考。念のためここでその分析した表を掲載する。

『妄想』の中にあらわれる「生」と「死」の回数

	生	死		生	死
序	三	五	第四節	一	一四
第一節	一一	一四	第五節		
第二節		一	第六節	一	一
第三節		一	結	一	二

- (24) 森鷗外訳、原題 *Erasing* 原作者ハンス・ランド Hans Land / 1861

- (25) ジェロム、Gerome, Jean-leon 1824-1904 フランスのアカデミスムの代表的画家、長い中近東生活で身につけた鮮やかな色彩と、冷たい理想化された仕上げで人気は高かった。その絵「王者」を参考として文末に掲載する。

- (26) マルティン・ブーバー著、『人間とは何か』1948 / 児島洋訳 / 理想社、一九六一年

- (27) 前掲書、十三頁

- (28) ブーバーは『人間とは何か』において、哲学的人間学という学問の立場からのカントの問いかけから、問題提起して、「一、私は何を知ることが出来るか？ 二、私は何をなすべきか？

- 三、私は何をのぞむことを許されるか？ 四、人間とは何か？ 第一の問いには形而上学が、第二の問いには道徳が、第三の問いには宗教が、そして、第四の問いには人間学が回答する」という。そして、その中にカントの問いを手掛かりにして、遡ってアリストテレス、アウグスティヌスを一々検討したのである。

- (29) 前掲書、一七八頁

- (30) 注(10) 同著一一六頁

- (31) 森鷗外は三つの遺書を残したが、その最後の遺書について、平川祐弘、中村重治、唐木順三、高橋義孝などの解釈が違っており、特に平川氏と中村氏の見方は真向から対立している。つまり、中野氏は『鷗外・その側面』で鷗外の遺書を「……ほとんど絶望的な最後の反噬を試みたのである」と、また別の箇所では「……死ぬ時になってじたばたしても駄目である。鷗外は死にのぞんで、何を怖れて「栄典」を受けまいとして力んだのか。何を怖れて「奈何ナル官権威力と雖此(死)ニ反抗スル事ヲ得ズト信ス」などという癡愚を力んで主張したのか。文学と文学史とは、こういう鷗外に冷静に復讐したと私は思う。鷗外は甘んじて受けねばなかった。「遺言」はそのことの記録である。そのためそれは悲劇である」と、鷗外の遺書を以て鷗外を批判しているのである。それに対して、敢然に立ち向かったのは平川氏の鷗外遺書の解釈である。平川氏は『魂和洋才の系譜』に収められた「地下の鷗外が心——遺言について——」において、

「私は解釈を無理強ひすることなく、すなおに鷗外の遺言を読みかえしたい。／『森林太郎トシテ死セント欲ス』／その気持ちをそのままそっと尊重したい。それが地下の鷗外の心になかなう道ではないだろうか」という鷗外の「地下の蘭が心」を引用して、鷗外の「森林太郎トシテ死セント欲ス」を解釈したのである。そこで中野氏の激しい怒りを買ひ、『和魂洋才の系譜のこと』という批判文を招いたが、それに対して平川氏は「中野重治氏の御立腹——地下の鷗外が心」という反批判文を世に送ったのである。詳しいことはそれぞれ平川氏の『和魂洋才の系譜』、中野氏の『鷗外・その側面』、『比較文学研究・三一』、『文芸』昭和四八年四月号、吉野俊彦氏の『虚無からの脱出・森鷗外』に出ている。本文では鷗外の遺言の経緯と背景については、これ以上触れたくないが、平川氏の解釈を擁護している立場というのが自ずから明らかであろう。

ジェロムの「二王者」